月報
岡崎の教育

平成14年10月1日
10月号
発行・編集
岡崎市教育委員会

今月の紙面

教育随想 …… 1
私立武蔵高等学校・中学校教諭
NHKラジオ『新基礎英語3』講師
手島　良氏
この人に聞く …… 2
書家・草筆教室主宰
丹羽　勁子氏
羅針盤 …… 2
大樹寺小学校長　鈴木　敏雄
ふれあい …… 3
恵田小　萩原　寛
新香山中　高鍬　利行
特集 …… 4
教室からの発信
お知らせ …… 6
フォト・ヒストリー …… 8
鼓笛パレード（昭和38年）
この本を …… 8

教育随想

「シー」?「ビー」?「エー」?

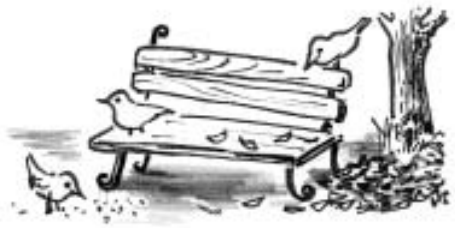
私立武蔵高等学校・中学校（東京）教諭
NHKラジオ『新基礎英語3』講師
手島　良　氏

父「今日はどこに出かけてたんだ?」
子「ディズニー・シー!」
父「へえ。そんなのが出来たのか。で、ディズニー・エーやディズニー・ビーにはもう行ったのか?」
ラジオ番組で紹介されていた実話の投稿である。聞いて笑った。が、次の瞬間「大人でさえこうなんだから、ましてや中学生なら当然だよな」と冷静になった。「ビードーシ」という音が頭の中で響いたからである。
英語では中学一年の初めに、is, am, are を教えるのが一般的である。教師は、文法のまとめと称して「この三語をまとめて、ビー動詞と呼ぶ」と生徒に伝える。まだ be という語は聞いたことも見たこともない生徒は、それまでに習った英語に関する知識（といっても二～三か月分くらいのそれ）を総動員して考える。やがて「ビー」はBに相違あるまいと結論付け、ある日、少しおどおどしながら教師に尋ねるのである。「あのー、せんせー、エー動詞はいつやるんですかぁ?」
この生徒は間違ってはいない。適切な推論をした。では間違いはどこにあるのか?
「ビー動詞」に限った話ではない。「サンタンゲン」などというのもある。生徒は間違ってよく「三単元」と書く。大切なことは（両方をまとめてしまえば）「主語が一人・一つなら is, was, does, 二人・二つ以上なら are, were, do を使う。ただし I と（一人の）you だけは例外」ということ。「動詞にも単複がある」というただそれだけのこと。
教えるべきことは何か。そのことを念頭に置きながら、今日もまた、明日の教案を練るのである。

（てしま　まこと）

ふるさとシリーズ

この人に聞く



大字創作「わらべ展」二十年

書家・草筆教室主宰
丹羽　勁子　氏

「赤い」「根っこ」などの文字が書道全紙いっぱいに太く、大きく書かれている。

今年の「わらべ展」に出す子供たちの作品である。その書の束を一枚ずつていねいにめくって、その子がなぜこの言葉を選んだか、その思いを本人に代わって話される。

竜泉寺町の自然に恵まれたところで書道塾「草筆教室」を開いている丹羽さんを訪ねた。大きな筆で大きな紙に大きな字を書くという大字創作の「わらべ展」を始めてから、今年で二十年が過ぎた。

「きっかけは、子供たちとの会話でした。先生の書いた大きい字を見たい。筆を見たい。そんな大きな筆で自分も書いてみたい。じゃあ、やってみようかで、始まったことです。」

「わらべ展の会場で、表装された作品を前にした子供たちの自信にあふれ、晴れ晴れとした表情を見るのを何よりの楽しみとして、回を重ねてきました。」

丹羽さん自身は、一九九九年に「どでんと」をはじめとする五点の作品をフランスで、翌年には、「切望」など三点の作品をカナダで発表された。来年はインドで同様の展覧会が予定されている。店の屋号や商標の揮ごうも数多く手がけている。

「大字創作の時は、五人一組です。字を書く子が王様で、あとの四人は家来です。王様が書いた文字を、家来が吸い取り紙で押さえていく、新聞紙で包むなど王様を手伝います。書き上がると、王様は家来になります。

一人で五、六枚は書きますが、子供はどきどきするんです。何枚も書けるのだから、気楽にいこうよと声をかけています。子供は、王様になって字を書くとき、真剣勝負です。私は気を引き締めて、王様と一心同体になります。」

一人の子の作品でありながら、大勢の子がかかわって創り上げていく様子は、学級での様々な教育活動を思わせる。

「二十年続けてきて感じるのは、子供が変わってきたなあということです。どうしてこっちをぱっと向けないのでしょうか。なんで手元のことが、集中してできないのかしらね。鉛筆を上手に持てない子が多いですね。」

と、手厳しい。

自分の思いを文字で伝えたいと、話される丹羽さんの前向きな生き方を感じた。

（氏　名　にわ　けいこ
生年月日　昭和二十二年九月十六日
住　所　竜泉寺町字後山二四八―六）

羅針盤

大切にしたいこと

大樹寺小学校長
鈴木　敏雄

これからの学力は、単なる知識の量だけでなく、生きる力を身につけているかでとらえる必要がある。そのためには、子供が実感を伴った理解ができるように、体験的な学習や問題解決的な学習を積極的に取り入れていくことが大切であろう。

「実験・観察」「見学・調査」「自然体験」「ものづくりや生産活動等の体験的な学習」等々である。生きる力の育成の核になるものは問題解決の繰り返しそのものではないだろうか。そして、感性を育て学び合う世界を創ることである。

また、個性を生かす指導の充実も重要である。子供の持ち味を発揮できる場面をつくるということである。そのためには、具体的な授業の場面で、じっくり考える場面、知的好奇心や探究心を呼び起こすこと、

A男の恵田川

恵田小　**萩原　寛**

四月の初めに、三年生全員で学校近くの恵田川を歩いた。やまびこ学習のスタートである。

小さいころ、恵田川でずぶぬれになって遊んだことのあるA男は、水の冷たさに驚くとともに、恵田川に住む生き物に関心を持った。

六月。恵田川の源流を求め、上流探検を行った。グループごとにカメラを持ち、マムシにおびえながらであったが、水が湧き出る場所を発見することができた。生き物調べ担当のA男は、ヘビ、アオサギ、バッタ、アゲハなどたくさんの生き物を観察メモに記録していた。ヘビが川の中にもいたことに驚きの声を上げていた。インターネットで、川の生き物のページを開いてあげると、A男はヘビのページに見入っていた。

七月。岡崎聾学校との交流の日、子供たちは、緊張の中にも自信を持って順番に発表していった。最後にA男が大きな声で発表した。

「次にやってみたいことを言います。昔の恵田川の様子が知りたいです。川の下流にも行きたいです。」

下流探検、ゲストティーチャーを招くことなど、次々と広がっていく活動の中でA男がどんな発見をしていくか、とても楽しみである。

心に残る味

新香山中　**高鍬　利行**

「やるなあ、スコット君。」スイカ割りを一発で決める。七月初旬、ニューポートビーチ市から来校生を迎えた時のことである。

全校集会、学級での歓迎会。言葉の壁もあってか、生徒たちはふれあい方に戸惑う。そんな緊張を「日本の文化を体験する会」が取り除いた。和服を着ての抹茶体験、五平餅・かき氷作りなど同じ体験をする。土俵を使っての相撲の紹介やロゴ入りTシャツ作りなど教科で考えた交流の工夫もなされた。生徒たちとスコット君の距離がみるみる縮まっていく。

お別れ会の最後に「明日の空へ」を歌った。生徒たちの気持ちから声が一つになる。身長の高いスコット君の顔が、うつむいて見えない。歌声に涙が混じる。歌い終えた後、静寂の時間が続いた。

三日間であったが、同じ年の人間、一人の人間としてのふれあいがあった。少しの言葉を媒体として、甘いスイカの味と苦かった五平餅の味とが入り混じり、スコット君との心に残る国際理解の味が今も生き続けている。

試行錯誤できる場面、自分の考えを表現できる機会をつくってやることが必要であろう。

文部科学省のミレニアム・プロジェクトによれば二〇〇五年には、すべての教室に二台のパソコンが配備され、インターネットでつながることになっている。一方で、生きる力とのかかわりで自然とかかわる体験不足が指摘されている。子供の直接体験を阻害するのでなく、相乗効果をもたらすコンピュータ活用の研究は不可欠である。

いずれにしても、いろいろな研修を通じて、学んだ内容を納得して自分の考え方に取り入れることが大切な気がする。「〇〇先生がいっているから」と他に寄りかかって、「正しいことを言おう」という他人から評価されることばかりを気にしているようではだめだと思う。たとえ、他人から「おかしい」と批判されても「自分はこれが納得できた」ということの積み重ねが自分の成長につながるのだと思う。

人にはいろいろな価値観があると思う。自分自身の責任において、自分が良いと判断したいくつかの実践を、仲間とともに議論を通してじっくり磨きあいたい。

教室からの発信

学級通信で結ぶ担任と子供・家庭

思いのこもった学級通信は、昔から担任と児童、生徒、保護者をつなぐパイプとして重視されてきた。今年度から、完全学校週五日制が実施され、ますますその重要さが増してきている。そこで、学級通信を改めて見直すきっかけとするために、学級通信を中心とした学級経営で教育文化賞を受賞されている太田一弘先生（県教委）と鈴木一生先生（矢作西小）に学級通信への思いを語っていただいた。

学級通信作りのきっかけ

―　わたしも学級通信を出していますが、お二人が学級通信を作るようになったきっかけについて教えてください。

太田　教師になったとき、先輩の先生に生徒たちと触れ合う場を作った方がいいぞと言われ、「黒板日記」から始めたのですが、保護者の方にも学級のことを知ってもらいたいと思うようになり学級通信を作るようになりました。

鈴木　新卒の研修にガリ版研修というのがあって、そこで初めて「学級通信」という存在を知りました。学校には、学級通信に力を入れている先輩がいて、その先輩のまねをすることから自分の学級通信作りが始まりました。何時間もかかって作って、さあ印刷だというときに破れてしまったことが何度もありました。

▲ ロウ原紙を鉄筆で切るガリ版

子供を見る目が育つ

―　当時の苦労がしのばれますが、他に学級通信を作る上でどんなご苦労があったでしょうか。

太田　わたしのいちばんの苦労は、学級通信に載せる生徒に偏りが出ないようにすることでした。名前をチェックして、全員が載るように心がけました。

鈴木　わたしも同じですね。生徒たちの良さを偏りなく載せていけるように、生徒一人一人のことを一生懸命見るようになりました。そのおかけで、学期末の所見を書くときは、ずいぶんと楽でした。

太田　自分も、学級通信作りを通して、生徒を見る目が育ったように思います。

子供、保護者の心を動かす

―　担任の思いを込めて出す学級通信ですが、その反応はどうだったのでしょうか。

太田　載っていることを話題にして、子供同士がよくしゃべっていましたね。あと、保護者の方がとても楽しみにしてくれていました。通信によって学級のことを知ってもらっているおかげで、いろいろな無理なお願いも聞いてもらえました。

▲ 鈴木一生先生

▲ 太田一弘先生

鈴木　最近、昔の教え子と話す機会があったのですが、「先生には毎日の学級通信で続けることの大切さを教わった」と言われ、授業のことも覚えていて欲しいと思ったけれども、うれしかったですね。

子供のよさを取り上げる

―　先生方にとって理想の学級通信とはどんなものなのでしょうか。

鈴木　まず、生徒たちのいいところが書かれていることですね。そして、学級通信をきっかけに、生徒たちがいろいろな問題を考えるようになっていくようなものでしょうか。

太田　やはり子供たちの良さが十分に表れている学級通信です。あと、わたしは、保護者の言葉をできるだけ載せるように心がけました。保護者向けの回覧板を作って、そこから保護者の言葉を拾い上げるようにしたこともありました。

鈴木　わたしも、保護者が作る学級通信を発行したこともありました。また、普段の通信でも、誕生日ごとに子供に対する親の願いを載せていくようにしました。学級通信で、学級のことを知らせるだけでなく、家庭のことも知ることができました。

生涯の宝物

―　この対談に触発される若い先生も多いと思いますが、そういった先生へのエールをお願いします。

太田　学級通信を出せばいい学級ができるわけではありません。学級通信を出さなくても素晴らしい学級を作っている先生は大勢います。ただ、子供たちとかかわっていくひとつの方法として学級通信を出していくなら、次の六つのことに気をつけて欲しいと思います。出していることに満足しない。続けることに意味がある。子供を見る目を育てるつもりで。子供たちの掃除の時間などに作っていては意味がない。先輩の先生に教えてもらう。子供たちの前で読んでやる。こういったことに気をつけて、頑張ってほしいと思います。

鈴木　時代が変わっても、学級通信の本質は変わりません。生徒の良さを見つめた学級通信を出していくことで、生徒、保護者、教師の関係がじわじわと良くなっていきます。一年経って、一冊の本になったときに、生徒の生涯の宝物となる。そんな学級通信作りを目指してください。そのためにも、先輩の先生の指導を積極的に受けてほしいと思います。

▲ ガリ版時代に作られた学級通信
（資料提供　岡崎市教育研究所）

お知らせ

● 教育最新情報

○少人数指導授業

今、学校にはよりきめ細かな指導や児童生徒の基礎学力の向上を目指した、少人数指導の充実が求められている。各学校では、様々な工夫を凝らして、少人数指導を進めている。その実践事例を紹介する。

A小学校では、五・六年生の算数の授業を、課題選択制による少人数指導で行っている。二学級を児童の希望により三つの少人数学習集団に分けて行っている。それぞれの学習集団は、基礎・基本の定着を目指して個別指導を重視したもの、問題解決的学習に重きをおいたもの、数学的な考え方を伸ばすことに重きをおいたものだ。

また、単元のはじめに、ガイダンスとレディネステストを行い、児童が学習集団を選びやすくなるように配慮している。さらに、自己評価や単元の終わりの到達度テストなどを実施し、学習成果の評価を行っている。

授業に参加した児童からは、「先生に丁寧に教えてもらえてよく分かったので面白かった」、「自分で調べる中で、算数の規則性などが発見できたことが楽しかった」などという声が多く聞かれた。さらに、単元の終わりの到達度テストでは、正答率が平均で八十五％という高いものであったとのことである。

B中学校では、一・二年生の英語の授業で、一学級を二つの学習集団に単純に分割して少人数指導を行っている。実践的コミュニケーション能力（情報や考え方を伝え合う能力）の向上を目指して、ペア学習やグループ学習を取り入れ、会話練習を中心にして授業を行っている。また、毎時間の終わりに確認問題やワークシートを使って、学習成果の評価を行っている。

ペアやグループによる学習を通して、自分のコミュニケーション能力に気付いたり、互いに認め合い高め合ったりすることが容易になる。さらに、毎時間の終わりの確認テストにより、自己評価能力が高まってくる。

▲ 課題選択制による少人数指導

B中学校では、九つのペアを一人の教師が指導している。担任の先生からは、生徒のつまずきや学力の把握が容易になり、指導が行き届くようになったという声が聞かれた。一方、生徒からは、「人数が少ないので、発表するとき緊張しない」、「先生が一人一人をよく見てくれるので分かりやすい」など、少人数指導のよさを多くの生徒が報告している。

少人数指導を実施する上で、「学習集団によって学習進度に差が出る」、「評価を行う場合に不公平が生じる心配がある」などの理由から、少人数の学習集団を編成せず、複数の教師による指導を行っている学校がある。

しかし、ここに紹介した事例にあるように、児童生徒の側から見れば、少人数の学習集団による学習が、よりきめ細かな指導となり、学習意欲の向上や基礎学力の定着が期待できることは明らかだ。様々な問題を解決し、少人数の学習集団を編成した指導を行っていくことが重要だ。

● 少年自然の家だより

○すぶちワイルドキャンプ

自然の家主催事業の中で最も人気がある「すぶちワイルドキャンプ」を、八月九日から二泊三日で実施した。小学四年から中学二年までの児童生徒百二十三名が参加して、盛大に行われた。

このキャンプは毎年テーマを決め、自然の中での体験活動を楽しむようにしているので、何度も参加している子も多い。今年は「竹名人」をテーマとし、竹の食器作りや竹とペットボトルを組み合わせた筏（いかだ）作りに挑戦した。

▲ さあ、手作り筏で出発だ！

●表　彰

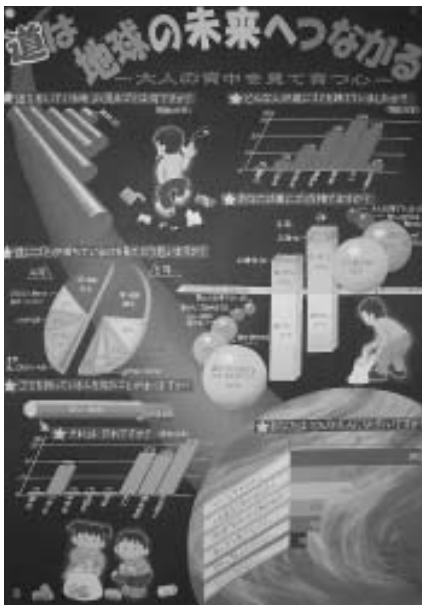
◆第二十六回岡崎市小中学生統計グラフコンクール

市長賞
竜美丘小　六年　植田　美咲
竜海中　三年　松井友里恵
竜海中　二年　竹内　愛理

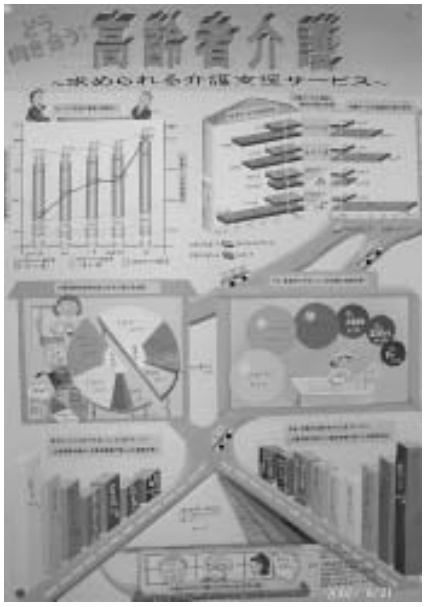
市議会議長賞
矢作東小　五年　太田　瑞希
竜海中　二年　山下恵理奈
山中小　四年　鈴木　大司
四年　内田　祐一

教育委員会賞
連尺小　四年　影山　七香
竜海中　一年　三並　克俊
城北中　一年　稲嶋　真紀
一年　細井　万愛

学校賞　竜美丘小学校



▲統計グラフコンクール
（市長賞：竜美丘小　植田美咲）



▲統計グラフコンクール
（市長賞：竜海中　松井友里恵）

◆第三十二回愛知県野生生物保護実績発表大会

県知事賞　東海中学校
県教育委員会賞　美合小学校
生平小学校

◆平成十四年度少年の主張愛知県大会

優秀賞（教育委員会賞）
河合中　三年　藤井美佑紀

◆平成十四年度全国中学校体育大会出場者

・陸上競技
女子100MH　矢作中　岩脇真奈美（全国二位）
男子走高跳　矢作北中　井上　諒
女子400MR　矢作北中　杉田・森田・鈴木・濱井・野田・大場・岩津中学校
女子100MH　北中　林　加世子
・水泳競技
女子100Mバタ　城北中　岩下なつみ
男子400MメドR　竜海中　坂野・天野・伊藤・荒井・柵木・高木
男子400MR　竜海中　坂野・天野・伊藤・荒井・柳・早川
男子100M背　城北中　西尾　太郎
・相撲
団体　美川中　青山・加藤・青山・高木
個人　美川中　青山　智昭
南中　平田　怜
附属中　野村　泰資
・バドミントン
個人W　城北中　梅村　隆
今村　昌平
個人S　城北中　三浦　時央
・バレーボール
矢作北中　清水・永田・花嶋・川畑・日比野・板谷・野村・道端・小島・山本・上原・市川

◆第二十二回全国中学生アーチェリー大会

・30M・18M部門
女子優勝　東海中　山本枝里子
三位　東海中　太田　幸穂
・18M・18M部門
男子二位　東海中　田口　慎也
三位　東海中　中田　貴大
女子優勝　東海中　青山絵美子
二位　東海中　山田　幸

◆日本ジュニアトライアスロン選手権長良川大会

二位　城北中　大塚　真弓

二泊三日の活動の大半は、中学生のリーダーを中心に八人ずつの縦割り班で行った。最初は知らない子同士の集まりも、活動を進めるうちにすっかり打ち解け合い、二日目には、自作の野人衣装を身につけ、大歓声を上げて筏遊びに興じていた。

最終日には、所員が工夫を重ねて竹で作った流しそうめんを心ゆくまで楽しんだ。

退村式のあと子供たちは、再会を約束し合って、名残惜しそうに山を去って行った。

○すぶち水の生き物観察会

自然に親しみながら、乙川の水生生物に関心を持ってもらおうと、八月二十一日（水）に「第一回すぶち水の生き物観察会」を開催した。たも網を手にし、小学四年から六年の児童二十八名が集まった。

講師の先生から水辺の生き物に関する話を聞いた後、さっそく川に入り、カワゲラやヘビトンボ、サワガニなどを夢中になって採取していた。

午後はカヌーや川遊びをして、夏の一日を楽しんだ。

フォトヒストリー 岡崎の教育

鼓笛パレード
（昭和38年）

写真提供　根石小学校

市内の小学校では、昭和三十四年前後から、太鼓に笛（リコーダー）やバトントワーリングを加えた鼓笛隊が誕生するようになった。音楽の授業でリコーダーが使用されるようになったのが、きっかけの一つである。運動会やパレードで演奏をする子供たちの姿に、学区の人々の関心が高まり、いろいろな行事に参加するようになった。

写真は昭和三十八年、できたばかりの鼓笛隊による公明選挙パレードの様子である。まだカラフルな制服姿ではない。

その後リコーダーが鍵盤ハーモニカに代わり、トランペットなどの金管楽器が加わるようになった。

・カット　矢作北中　鈴木和人

オアシス

親子で出かけたり、遊んだりすることを意識している母親が約五十パーセント。ある食品メーカーが学校五日制における母親の意識を調査した結果である。

家庭を大切にするという五日制の趣旨が浸透し始め、親子の絆（きずな）を深めようとしている明るい兆候である。

芯（しん）にした丸太に紅白の布を巻き、「わっしょい、わっしょい」、子供みこしの声が聞こえて来る。

十月の空が晴れ渡り、そろいの法被を着た大勢の大人と子供がにぎやかに歩いて来る。通りの家々から祝儀袋を手にした人々が集まり出す。さあ、秋の祭りの始まりだ。

アケビの実を子供たちが採って来て食べていた。大きい子が小さい子に「これはまだ青いから食べるな」と教えている。子供たちの話によると、お寺の柿の実が食べごろで、栗も今年は豊作だそうだ。まさに実りの秋である。自然は子供たちの生きた教科書である。

鈴木、太田の両先生が語る「学級通信は出せばいいというものではない」という言葉に、逆に通信への強い思い入れを感じた。今後ますます学級通信の果たす役割は重くなる。子供、保護者、教師がともに結びつき、成長しあえる学級通信を作っていきたいものである。

この本を

＊神かくし　南木　佳士
文藝春秋　¥1333

＊老いてこそ人生　石原慎太郎
幻冬舎　¥1500

＊子どもと教師が育つ教室　前田　勝洋
学事出版　¥1600

＊検死秘録　支倉　逸人
光文社　¥1575

＊生きる　乙川優三郎
文藝春秋　¥1286

殉死がまだ武士の名誉として許されていた時、当然周りの人々から真っ先に殉死すべきであろうと思われていた武士が、ある事情で殉死を思い留まる。そのため、世間から誹謗（ひぼう）中傷を受け、その冷たい視線に耐えかねて、息子は切腹、また嫁いだ娘からも義絶される。

人間社会で、１つの規範に背いたとき、その正否にかかわらず、それを打ち破るのには壮絶なエネルギーが要求される。生きることへの意味を問いかけた著者の目は鋭い。